

校注古典叢書

竹取物語

三谷榮一校注

明治書院

著者略歴

三谷栄一

明治四四年 東京生まれ

昭和一〇年 国学院大学国文学科卒業

現在 実践女子大学教授 同大学図書館長

国学院大学講師

住所 東京都世田谷区桜一丁目三〇の九

主要著書 竹取物語の鑑賞 竹取物語詳解

物語文学史論 物語史の研究

狭衣物語（日本古典文学大系）

日本文学の民謡学的研究

徒然草解釈大成（共編）

校注古典叢書

竹取物語

¥340

昭和四三年四月一五日 印刷
昭和四三年四月二〇日 発行

著者 © 三谷栄一

発行者 株式会社 明治書院

代表者 三樹 彰

印刷者 株式会社 柳沢印刷所

代表者 柳沢一郎

製本 正文社

発行所 株式会社 明治書院

東京都千代田区神田錦町一の一六
電話東京（二九四）五三三六（代）
振替口座東京四九九一番
△検印廃止

目次

凡例	三
本文	五
一 かぐや姫のおひたち	五
二 つまどひ	八
三 仏の御石の鉢	一四
四 蓬萊の玉の枝	一六
五 火鼠の裘	二六
六 龍の首の玉	三二
七 燕の子安貝	三九
八 御狩のみゆき	四六
九 天の羽ごろも	五四
解題	六九
一 竹取物語の位相	六九
二 竹取物語の時代的背景	七〇

三	竹取物語の伝承性……………	七
四	竹取物語の土着性……………	五
五	かぐや姫と伝承性……………	六
六	伝奇小説の系譜……………	八
七	竹取物語の成立年代……………	九
八	作者とその周辺……………	一〇
九	竹取物語の文芸的評価……………	一一
一〇	竹取物語の伝本……………	一二
付	録……………	一三
一	竹取翁伝説集……………	一四
二	竹取類似説話集……………	一五
三	竹取物語関係資料集……………	一六

凡 例

一、底本には流布本系統に近くて、現存伝本中で最古の完本と目される天正二十年（一五九二）書写の奥書がある『武藤本』を用い、諸本によって校訂したが、明らかに誤字・誤脱と認められるもの以外は出来るだけ本文に忠実に従うことを旨とした。

一、「かなづかい」・「漢字」については講読上の便宜を考慮し、「歴史的かなづかい」に改め、「かな」を適当に「漢字」に宛てたが、傍記して原文に復帰しうるように示した。また底本中の漢字でも、必要な場合には校訂者が随時書き改め、その場合には（ ）に入れて底本の姿を傍書した。

一、送りがな並びに句読点と歌に付した国歌大観の番号のみは、これを校訂者において施した。

一、頭注には、講読上必要な注釈にとどめ、また研究や鑑賞上に必要な事項をも付記した。

一、宮内庁書陵部蔵の「竹取物語絵巻」よりさし絵十六葉を挿入し理解の助けとなるよう努めた。

一、解題は、学界の現段階における諸成果を吸収し、新見を付し、今後、若き学徒達の研究の指針となるように努力した。単なる解説ではなく、論文としても新鮮な内容を盛っていると自負している。

一、巻末には、竹取物語の成立や竹取説話の展開の研究に必要な諸資料を集成し、「竹取翁伝説集」「竹取

類似説話集」「竹取物語関係資料集」として付した。

一、私の竹取物語に寄せる関心は、実は私の学生時代、この明治書院から発行された恩師武田祐吉博士校訂による『校註竹取物語』（昭和五年刊）の清新な頭注と暗示に豊んだ詳細な解説とによって啓発されたといつてよい。従来、私が竹取物語の研究に多少努力して来たのも、全く武田先生の右の書による影響によるものである。今度、明治書院が新たに『校注古典叢書』刊行に際し、本書の校訂を依頼された。先生をめぐる奇しき因縁と光栄とを思い、初心に返りながら努力したつもりである。本書を成すに当たり、終始尽瘁くだされ、ことにさし絵において配慮して頂いた編集部の清水敬氏、並びに本書の校訂に協力され、校正に尽力して下さった千原美沙子氏に対し、心から感謝したい。

昭和四十三年三月

著者しるす

1 物語や説話の冒頭に用いられる慣用句。『竹取物語』のほかに『平仲』『大和』『落窪』物語をはじめ、『今昔』『宇治拾遺』物語等の説話物語の冒頭に見られる。そしてこの冒頭の時間規定は『源氏物語』の『桐壺』の冒頭の「いづれの御時にか」に連なるのである。

2 「竹ヲ取テ籠(コ)ヲ造テ要ズル人ニ与ヘテ其ノ功ヲ取テ世ヲ渡ケルニ」(今昔)・「作_レ箕為_レ業」(詞林采葉集)

3 底・さかき。古活字十行本・正保三年刊・前田本・戸川本「さるき」。田中大秀本・蓬左文庫本・大覚寺本・武田本「さかき」。古代n音とr音と交替し、駿河(須流賀)・群馬(久留米)・敦賀(都留賀)のごとし。讀(ヨミ)もサルキに転化し、その「る」と「可」の草体の誤読からサカキとなった。この物語が、後に大和国十市郡(一五ページ)に關係あることなどから、この「さぬき」も、大和国広瀬郡散吉(さぬき)郷ではなかったか。「散」

一 かぐや姫のおひたち

今は昔、竹取の翁^{おきな}といふもの有りけり。野山にまじりて、竹を取りつゝ、よろづの事につかひけり。名をば、さぬきのみ⁴やつこまろとなむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋^{ひとすぢ}ありける。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それをみれば、三寸ばかりなる人、いとうつくうてゐたり。

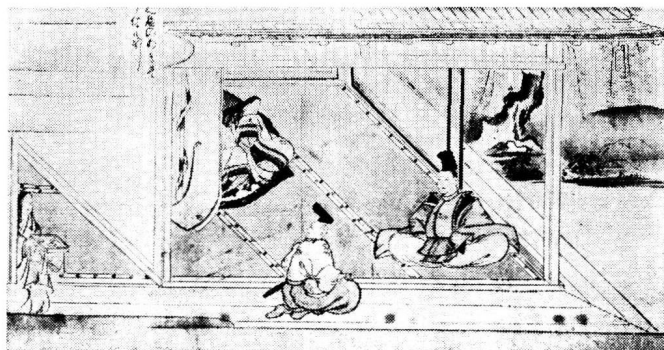


竹 取 物 語

- は蘇早切または類早切であり、「讃」は則肝切 早は古案切で肝が古早切であるから、四声はともかく、同声同韻と認めて、「散」と「讃」との相違は顧みなくてよい。「岐」と「吉」もともに甲類のキを表わす仮名。『三代実録』に大和国正六位上散吉（さぬき）大建命神、散吉伊能城神に従五位下が授けられるとあり、『延喜式』に大和国広瀬郡讃岐神社とあるが、同神と目される。後段に「造曆が家は山本近くなり」とある点からも大和の散吉か。
- 4 底・みやつこ。「御狩の御行」「天の羽衣」の段に「みやつこまろ」とある。
- 5 底・ありけり。
- 1 「子」に「籠（こ）」を掛けた洒落。
- 2 底・女。
- 3 底・竹取りに。
- 4 節（ふし）と節との間の空洞な内部。和名抄、竹貝「両節間、俗云、与（ヨ）」

翁いふやう、「我あさごと夕ごとにみる竹の中に、おはするにて知りぬ。子となり給ふべき人なめり」とて、手にうち入れて家へ持ちて来ぬ。妻の軀（おひな）にあづけて養はす。うつくしき事かぎりなし。いと幼ければ、籠（こ）に入れて養ふ。

竹取の翁、竹3を取るに、この子1をみつけて後に、竹取るに、節2をへだて、よ4ごとに、こがある竹を見つくる事かさなりぬ。かくて、翁やう／＼ゆたか



5 女子が年頃となって、童女時代の「うなるはなり」の髪を結いあげ垂髪に改め、女の成年のしるしとした。

6 女子が成長し、十二、三歳になると、初めて裳を着、髪上げした。宇津保・藤原の君「：あて宮は御年十二と申しける二月に御裳奉る程もなくおとなになりいで給ふ」。髪上げと同じく女子の成年式。

7 三室戸は山城国宇治の地名。齋部は姓で中臣氏と同様に祭祀を司る氏族。秋田は名。古本「みむろのあきた」。みむろといえは神をまつる所の意で、即ち御室、大和の三輪山や龍田などの別名として使われている。とくに、「みむろ」「みもろ」は、万葉時代では大和国三輪山の代名詞のように用いられているから、「みむろ」とすれば三輪山か三輪地方を指すのかも知れない。そこに住む齋部氏か。名付け親は一族の長老がなるのが古代の習慣でここもかぐや姫と同族の人とみるべきか。

になり行く。

この児養ふ程に、すく／＼と大きになりまさる。三月ばかりになる程に、よきほどなる人に成りぬれば、髪上などさうして、髪上げさせ、裳著す。帳の内よりも出ださず、いつき養ふ。この児のかたちけうらなる事世になく、屋のうちは暗き所なく光満ちたり。翁心地あしく、苦しき時も、この子をみれば、苦しき事もやみぬ。腹立たしきことも慰みけり。

翁竹を取る事久しくなりぬ。いきほひ猛の者に成りにけり。この子いと大きに成りぬれば、名を三室戸齋部の秋田を呼びてつけさす。秋田、なよ竹のかぐや姫と付けつ。この程三日うちあげ遊ぶ。よろづの遊びをぞしける。男はうけきはらず呼び集へて、いとかしこく遊ぶ。

8 姫のなやかさと竹からの生まれを示す。万葉集卷二「なよ竹のとをよる子等」。

9 光り輝く意の名。古事記の「火之枝（かが）毘古神」「火迦具（かが）土神」「万葉集の「加我欲布珠（九五）」「蚊蛾欲布（二六四）」などの「かがよふ」（耀ふ）と同類。古事記に、大筒木垂根王の女として「迦具夜比売命」の名が見える。しかもその大筒木垂根王の兄弟に讃岐垂根王がいる。恐らく讃岐垂根王は大和朝廷に奉仕する関係などから、讃岐の本領とは別に、大和の広瀬郡に讃岐郷があり、讃岐神社があったかとも目される。

10 「うけ」は「うけ入れる」意。受け入れたら嫌ったりせず。古本「上下えらばす」。

1 仏典から出た語で、世間・世の中の意。大きく展開する入り口としてふさわしい雄大な表現。それだけにこの求婚譚に寄せる作者の抱負が窺える。

2 「かいまみ」の転。後世「垣間

二 つまどひ

世界の男、¹あてなるも賤しきも、いかで、このかくや姫を得てしがな、見てしがなと、音に聞きめでゝまどふ。そのあたりの垣^{かき}にも家の外^とにも、居^をる人だに、たはやすくみるまじきものを、夜は安^いき寝^いもねず、闇^{ぐみ}の夜に出でて穴をくじり、かいばみまどひあへり。さる時よりなむ、よば³ひとは、いひける。

人の物ともせぬ所にまどひありけども、なにのしるしあるべくもみえず。家の人どもに物をだに言はむとて、いひかゝれども、ことゝもせず。あたりを離れぬ公達^{4さんだち}、夜を明^{あか}し日を暮す、多かり。をろかなる人は、やうなき⁵ありきはよしなかりけりとて、来^こず成りにけり。

見」の字が当てられるが、本来は「かい」は「かき」の音便で接頭語。「ま見」は「目見」で、「まみゆ」などと同じ。「見る」の意の強められたもの。古代の物語では、恋を生み、筋を展開させる契機となる重要な語で、『伊勢物語』初段や『源氏物語』の中では、色好み譚としての場面を構成する重要なかぎとなっている。

3 「呼ばふ」(求婚する)の名词形で、男が女のもとに行き、名を呼び逢うこと。「夜這ひ」に掛けた洒落。

4 底・君たち。

5 やう(益)なき。

6 底・あるき。「り」と傍書。

7 底・来ける。

8 田中大秀の「解」や加納諸平の「考」などでは、これら五人を、壬申の乱の殊勲者として、持統・文武両朝にわたって、いつもそろって特別待遇が与えられた丹比真人・阿部朝臣御主人・大伴宿禰御行・石上朝臣麻呂・藤原朝臣不比等にあてている。元来、皇子の呼び名は乳母(または

其の中に猶いひけるは、色好みといはるゝかぎり五人、思ひやむ時なく、夜屋来けり。その名ども、石作皇子、車持の皇子、右大臣阿部のみむらじ、大納言大伴の御行、中納言石上の麻呂たり、此の人々なりけり。世の中に多かる人をだに少しもかたちよしと聞きては、見まほしうする人どもなりければ、かぐや姫を見まほしうて、物もくはず思ひつゝ、かの家に行きて、たゞすみありきけれど、かひあるべくもあらず。文を書きてやれど、返事せず、わび歌など書きておこすれども、かひなしと思へど、霜月師走の降りこほり、みな月の照りはたたくにもさはらず来たり。

この人々、ある時は、竹取を呼び出でて、「むすめを我に賜べ」と伏し拝み、手をすりの給へど、「おのがなさぬ子なれば、心にも従はずなむある。」といひて、月日過ぐす。かゝれば、この人、家に帰りて、物を思ひ、祈をし、願を立つ。思ひやむべくもあ

養母)の家の姓によってとなえられた。石作皇子に丹比真人島を当てるのは、丹比真人島は元来王族で、姓氏録によると、石作、丹比は同祖親縁の間柄。島の父、丹治比王が乳母の丹比氏によって名のつたように、島も乳母の縁ある石作によつたものか。車持皇子を藤原不比等に当てるのは、『不比等公伝』に「内大臣鎌足二男、一名史、母車持国子君之女与志古娘也。車持夫人云実天智天皇皇子云々」とあり、不比等の母は車持氏、しかも天智天皇の皇子とあるから、養家の車持姓を名のらせて虚構したものか。他の三人は実在名。阿部のみむらじは源氏物語には「阿部のおほし」とある。「みうし」の誤写か。

1 翁が姫を男と結婚させないことがあろうか。

2 底・「を」なし。

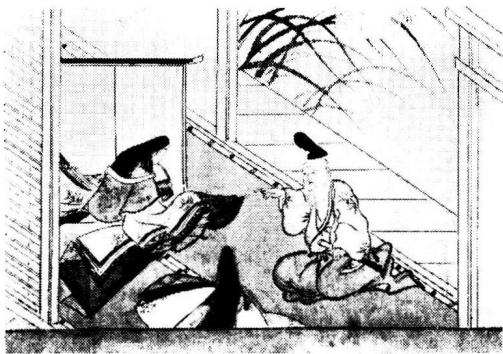
3 「見ゆ」は動詞「見る」に古い受身の助動詞「ゆ」が接続した形。見られることは積極的のいえば

らず。さりともつるに男あはせ¹。ざらむやと思ひて、頼み^{たの}をか²けたり。あながちに心ざし²を見³えありく。

これを見つけて、翁、かぐや姫にいふよう、「我が子の仏、

⁵変化^{へんげ}の人と申しながら、こゝら⁵大きなまで養ひたてまつる心ざしおろかならず。翁の申さむ事は、聞き給ひてむや。」といへ

ば、かぐや姫、「なにごとをかの給^{たま}はむ事はうけたまはらざらむ。変化^{へんげ}の者にて侍り^{はべ}けむ身とも知らず、親とこそ思ひたてまつれ。」といふ。翁、「うれしくもの給^{たま}ふものかな。」といふ。「翁、年七⁶



見せると同じになる。

4 「あが仏」わが君と同じく、
相手を大切にし、親しんで呼び
かける第二人称。元来、自分の
深く信仰する仏をあがめて呼ぶ
語。

5 仏語。人間でないものが仮に
人間の姿を現わすのをいう「化
人」ともいう。平安中期以後、
妖怪の意をも持つようになるが
元来は、出生の異なる、人間以
上の威力を持つ天上界から来た
ものの意。

6 後の「天の羽ごろも」の段に
は「今年五十ばかりなりけれど
も」とあって年齢に食い違いが
ある。

7 門は家門・一族。

8 「なんといふ」の音便。

9 五人の中の内ずれか一人に。
どの人かひとりに。古今集恋三
「思ふどちひとりひとりか恋ひ
死なばなれによそへて藤衣き
む」。

10 浮気心。「あだし心」と同じ。

11 底・おろかななる。(マ)と
傍書。

十に余りぬ。今日とも明日とも知らず。この世の人は、男は女に
あふことをす、女は男にあふ事をす。その後なむ門⁷広くもなり侍
る。いかでか、さることなくてはおはせむ。」

かぐや姫のいはく、「なん⁸でふさることかし侍らむ。」といへ
ば、「変化^{へんげ}の人といふとも、女の身もち給へり。翁のあらむかぎ
りは、かうてもいますかりなむかし。この人々の年月を経て、か
うのみいましつゝの給^{たま}ふ事を思ひ定めて、一人⁹／＼にあひたてま
つり給ひね。」といへば、かぐや姫のいはく、「よくもあらぬか
たちを、深き心も知らで、あだ心¹⁰つきなば、後悔^{のちくや}しき事もあるべ
きをと、思ふばかりなり。世のかしこき人なりとも、深き心ざし
を知らではあひ難しと思ふ。」といふ。翁いはく、「思ひの如^{ごと}く
もの給^{たま}ふものかな。そも／＼いかやうなる心ざしあらむ人にか、あ
はむとおぼす。かばかり心ざしおろかならぬ人々にこそあめれ。」¹¹

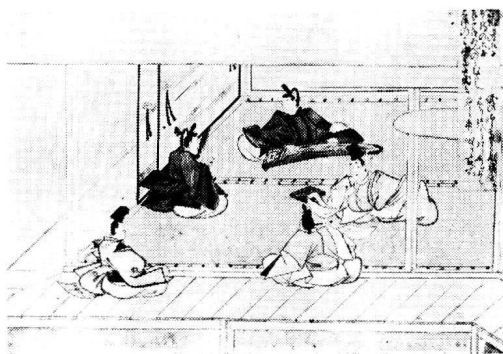
- 1 この物語の会話文で注意されることは、会話の前後の地の文に特殊な記述法であって、同一語で「かぐや姫のいはく……といへば」「かぐや姫のいはく……といふ」の如く、前と後ろとに繰り返されることである。これは古事記、祝詞、万葉に多く、伊勢、大和、宇津保などにも見える古い直接話法の定型である。
- 2 見たい、聞きたい、知りたいなど好奇心が動く状態。
- 3 中古語では連用修飾語。いつものように。源氏夕顔「くだくだしければ例のもらしつ」古本「例の如く来集りぬ」。
- 4 笛や琴の楽譜を口で歌うこと。声歌とも書く。源氏若菜「拍子とりてさうがし給ふ。院も時々扇打ならしくてはへ給ふ」。
- 5 歌などを小声でひくく吟誦すること。新撰字鏡「囁字音半久」。
- 6 扇を手のひらなどで打って拍子をとること。
- 7 「かしこまり」の下に「なり」

かぐや姫の¹いはく、「なにばかりの深きをか見むといはむ。いさゝかの事なり^也。人の心ざしひとしからむや。いかでか、中にとりまさは知らむ。五人の中に、ゆかしき物を見せ給へらむに、御心ざしのまさりたりとて仕^{つか}うまつらむと、そのおはすらむ人人に申し給へ。」といふ。「よき事なり。」とうけつ。

日暮るゝほど、例³の集まりぬ。

あるひは笛を吹き、あるひは歌をうたひ、あるひは唱歌⁴をし、あるひはうそ吹き⁵、扇⁶をならしなどするに、翁出^ひでていはく、

「かたじけなく、きたなげなる所



が省略。(恐縮至極でございます。)

8 底・君たち。

9 南山住持感応伝「世尊初成道時四天王奉三仏石鉢、唯世尊得用余人不能持」。西域記「波刺斯国云々釈迦仏、鉢在此王宮」。

10 列子「渤海之東(略)其、中、有、五山焉。(中略)一曰、岱輿、二曰、員嶠、三曰、方壺、四曰、瀛洲、五曰、蓬萊、(略)其、上、台觀、皆金玉、其、上、禽獸、皆純縞、珠玕之樹、皆叢生、華実、皆有滋味、食之、皆不老不死」。

11 倭名抄「神異記云、火鼠比稱須美取、其、毛、織、為、布、若、汚、以、火、燒、之、更、令、清、潔、矣。裘(かはぎぬ)は皮衣。倭名抄「裘 説文云裘 音求。和名加波古路毛。俗云、加波岐奴。皮衣也。源氏末摘花「上著にはふるきのかはぎぬ、いと清らにかうばしきを著給へり。」

12 莊子、雜篇「夫千金之珠、必、在、九重之淵而、曜電、領下」。

つ ま ど ひ

に、年月を経て物し給ふ事、極りたるかしこまり。」と申す。

『翁の命けふ明日とも知らぬを、かくの給ふ公達にも、よく思ひ定めて仕うまつれ。』と申すもことわりなり。『いづれもおとりまさりおはしまさねば、御心ざしのほどはみゆべし。仕うまつらむ事は、それになむ定むべき』といへば、これよき事なり。人の御恨もあるまじ。』といふ。五人の人々も、「よきことなり。」といへば、翁入りていふ。

かくや姫、「石作の皇子には、仏の御石の鉢といふ物あり。それをとりてたまへ。」といふ。「車持の皇子には、東の海に、蓬萊といふ山あるなり。それに白銀を根とし、黄金を茎とし、白き玉を実として立てる木あり。それ一枝折りて給はらむ。」といふ。「今一人には、唐土にある火鼠の裘を給へ。大伴の大納言には、龍の首に五色に光る玉あり。それを取りて給へ。石上の中納言には燕

1 一名「寶貝」この形状から古
来生殖上の神秘力のあるものと
して、妊婦が所持して安産の護
符とした。一方、「燕」もまた生
殖上の神秘力があると考えられ
ていたらしい。いずれも現在も
見られる民間信仰で、子安貝は
忘れても、紀州地方では燕の巢
に持って来た小貝で水を飲むと
腹痛が直るとか(『紀州有田民俗
誌』、相模の津久井郡内郷村で
は、燕が十年一つ家に巢をかけ
た時は、その巢の中にその札心
に蛭貝を入れて置くといわれる
が、又一説には、この貝は燕が
海を渡って来る時に乗って来た
のだという(『土俗と伝説』)。

2 底・いひ給へ。

3 底・あたりよだに。

4 勘定高いこと。労少なく功多
きを望むこと。打算。「したく」
はあらかじめ将来を計る心の用
意の意。後の「天の羽ころも」の
段で「さし籠めて守り戦うべき
したくみをしたり」とある。
6 5 長距離の意。古本「八千万里」。
6 底・「へ」なし。「天竺」は古代

のもたる子安¹の貝一つ取りてたまへ。」といふ。翁、「難^{かた}き事ど
もにこそあなれ。この国にある物にもあらず。かく難^{かた}き事をば、い
かに申さむ。」といふ。かぐや姫、「何か難^{かた}からむ。」といへば、
翁「とまれかくまれ申さむ。」とて、出でて、「かくなむ。聞^{きこ}ゆる
やうに見せ給へ。」といへば、皇子^{みこ}達上達部^{かんだちべ}聞きて、「おいらか
に、あたりよりだになあきそとやはのたまはぬ」といひて、う
んじて皆帰りぬ。

三 仏の御石の鉢

猶この女見では、世にあるまじき心地^{ちち}のしければ、天竺^(てんぢく)にある
物も持て来ぬものかはと、思ひめぐらして、石作の皇子は、心^この
したくある人にて、天竺に二つと無^なき鉢^{はち}を、百⁵千万里の程行きた